

## 研究ノート

## 大宰府官窯としての松倉瓦窯跡

山 村 信 榮

## 1 はじめに

古代大宰府においては奈良、平安時代を通じて大宰府独自の意匠を持つ瓦が、大宰府政庁を中心とした官衙や域内に成立した寺院に供給され、その供給元たる瓦窯はほとんどが大宰府条坊域内もしくはその近隣の丘陵部で発見されている（第1図）。

今回取り上げる松倉瓦窯跡は筑前国分寺の南約500mの旧大字坂本字松倉にある小規模な丘陵の南西斜面にあり、昭和30（1955）年の宅地造成によって地権者の縁者により発見、届出されたことにより知られることとなった。

## 2 窯跡の発見

そのことは同年5月17日の朝日新聞に取り上げられている。記事によれば瓦窯3基が宅地を建てる整地中で発見され、福岡県教育庁埋蔵文化財係の麻生技官と県文化財専門委員である森貞次郎氏が現場の確認をおこなっている。また、遺物等について近く学術調査を行い、文化財としての保存処置を講じたい、と結んでいる。

この当時の経緯や記録類を現在の地権者が保存されており<sup>註</sup>、当時、木村清氏らが記録した資料によれば、自宅の建築に伴う木村清氏本人とその親族や知り合いによる山林開墾作業中に多量の瓦の堆積を掘り当て、その近くで窯の口とみられる石組みを次々発見し、見つけた順に1号窯、2号窯、3号窯と名付けている（第6、7図）。そのうち2号窯は窯の外形はマンドリン形で、奥行きが3m、直径（燃焼部の幅か）2.13mで、焚き口から1.15mで段差があるなど、構造がわかる程度に掘削を広げて確認している。また、のり面の土壌中と2号窯からそれぞれ鬼瓦が出土している。掘削中に福岡高校の森貞次郎氏（考古学）、筑紫丘高校の近藤典二氏（歴史学）が来訪し、出土した瓦が平安時代のものであることを告げている。そして新聞報道があった後に埋め戻され、直後に宅地が建設されている。

## 3 窯跡の学術調査

宅地が建ったことにより県が発掘調査を行うことはなかったが、昭和37（1962）年8月に、後に日本窯業史研究所を立ち上げた早稲田大学の大川清氏によって2号窯が再度発掘調査され、その成果は昭和47（1972）年に大川氏が刊行した『日本の古代瓦窯』に「坂本西二号窯跡」の名称で記録の一部が収録されている。

「筑前国分寺南方にある細長い独立丘陵の南斜面の花崗岩の地山に構築したものである。地主木村清氏が宅造の際に丘の裾を削平して四基の瓦窯を確認したうちの西端に位するものである。現存長約四・二メートル、階の部分での幅は約一・八メートルで窯知り方へ逐次幅はせばまり、窯尻で一・一メートルである。燃焼部から焚口は、木村家の家屋の下になるため、発掘できなかったが、階から燃焼室の一部は確認できた。燃成室は中央部から窯尻にかけて床が破壊され、窯尻部に一部床がのこっていた。窯尻部にのこる床上にはわずかに細い溝が二本みられた。これは、瓦片を積んで焼台とするために設けられたもので、つくりつけの段とは性格が異なる。瓦積み of 段状施設は二

段程遺存していた。階は強烈な火があたるため、女瓦を建てて補強してあったが、表面に立てならべるだけではなく、完形品を芯にしてスサ入粘土で壁を構築してあった。燃焼室の勾配は約四〇度であった（筆者調査）。」（第8図）

平成20（2008）年に出土遺物と共に株式会社日本窯業史研究所から本市に寄贈された太宰府市内での瓦窯跡に係る調査記録の中に、蔵司窯跡と共に松倉窯跡（資料注記では坂本窯跡、坂本西窯跡など名称は不統一、1～3号の呼称は木村清氏の番号を踏襲）の遺構実測図と現場のモノクロのベタ焼き写真が含まれており、文章で示された現場の状況が見て取れる（第6、8、9、10図）。木村氏の発見時では3基とされていた窯の数は大川の調査報告では4基とされ、そのことは寄贈資料中にある平板測量図にも破線で4基の窯の位置が記されていることと合致する（第6図）。市では2022年11月に家が解体されたことに伴い、地権者の同意を得て現地踏査をおこなったところ、1号と3号窯跡は被熱で赤い弧を描く帯状に硬化した窯体のがり面に見られ、2号窯跡は窪んだ状態で斜面中にあることが認識でき（第4、5図）、改めて地形測量をおこなった結果、おおかた窯跡群は大川氏が1962年に調査した状況のまま敷地内に残されていることを確認した（第7図）。

#### 4 出土遺物

遺物には木村清氏発掘のもの、大川清氏発掘調査のもの、2022年11月の家屋解体時に回収されたものがある。鬼瓦2点、軒平瓦、軒丸瓦、平瓦、丸瓦、土器類が出土している。

##### a. 鬼瓦（第12、13図）（文献1）

鬼瓦は還元焼成の灰色を基調とする立体的な型作りの大宰府式鬼瓦A類と、酸化焼成で黄褐色を基調とする平板な一枚づくりの大宰府式鬼瓦B類であり、どちらが2号窯から出土したのかは現状では確定できない。A類のものは頭頂部にまで珠文帯が廻り、軒丸瓦の組み合わせが想定されていない、丸瓦の受けが無い意匠で、眉尻や髭の毛の表現が省略され、眼球や額の皺も8世紀の厳しい表情の表現とは異なり、技術的な後退が見られる。焼成前に眉間に釘穴が穿たれ、頬から下部が欠損している。高さ22.7、幅24.2cmを測る。大宰府式鬼瓦A類はおおよそ8世紀の所産で捉えられている。松倉窯では8世紀の鴻臚館系の軒瓦や縄目の叩きを持つ瓦が出土していないことから、松倉瓦窯の操業時点ではA、B二つの系統の鬼瓦が生産されていた可能性を示している。B類のものは掘削作業で3つに割れたものが、おそらく九州歴史資料館によって石膏で復元接合されており、高さ40.8、幅34.2cmを測る。釣り目、釣り眉、牙を剥いた口というA類の要素を持つが、眉や目、頬は板に張り付けられたようなつくりで、表現が形式的で写実性は失せ、平板な作りで稚拙さが目立つ。頭頂部は軒丸瓦の組み合わせが想定されていないため窪みはない。サイズとしては両者とも大棟先というよりは隅棟、下り棟先の鬼瓦のサイズといえる。

##### b. 軒瓦（第11図）（文献1）

太宰府市史考古資料編に軒丸瓦1点、軒平瓦2点の瓦当面の拓本が示されている。軒丸瓦（1）は単弁一重弁一弁端湾入弁式（九州歴史資料館分類186型）に当たり、消費地としては大宰府政庁跡が挙げられる。軒平瓦は左から右に流れる偏向唐草文（3）（九州歴史資料館分類554型）で、8世紀のものに比べ幅が狭く顕著に小型化している。これも消費地としては大宰府政庁跡が挙げられる。もう一つは、均整唐草文（685A型）の右側の破片で（2）、これも消費地としては大宰府政庁跡が挙げられる。

軒丸、軒平瓦とも政庁第III期の所用瓦と位置付けられる。

## c. 丸瓦・平瓦、文字瓦（第11図）（文献1、2）

格子目の叩きのものが出土している。大宰府出土瓦の格子目の分類のうち、縦横の交点芯心の数値の大きさから1.0cm以下をa（小目）、1.5cmまでをb（中目）、1.5cm以上をc（大目）に区分した場合、松倉瓦窯跡出土分はほとんど中目に該当し、格子にも正格子、縦長斜格子、横長斜格子、横長二重斜格子がある。少数小目の斜格子を含む。

叩き目中にあしらわれた文字には正文字の「佐」（2種 第11図4、5、九州歴史資料館分類902A、902C型）、反転文字の「佐」（3種 第11図6,7,8、九歴902Ba、902Db、902F型）、「未」（第11図9 九歴914型）が出土している。

## 5 大宰府官窯としての松倉瓦窯跡（文献3、5、6）

松倉瓦窯跡出土の瓦の格子目の文様は、太宰府市で分類した格子目叩きの分類のD群期に位置づけられ（文献2）、この時期の標識遺跡である剣塚瓦窯の文字瓦と比較した場合、松倉瓦窯跡出土分は剣塚瓦窯の後出のものと認識される。剣塚瓦窯は窯内で大宰府土器編年VIB期からVII期に位置付けられる土師器坏aが瓦とともに出土しており、10世紀初頭前後と報告されている。周辺には当該時期の墳墓が展開しており、瓦窯に土葬墳墓が切り込まれていた可能性が想定され土器はその副葬ないし供献品であった可能性がある。そうであれば剣塚瓦窯はそれ以前に埋没していたことになる。このことから松倉瓦窯跡出土遺物は10世紀前半以降に位置づけられるものといえる。また、軒瓦が政庁第III期の所用瓦と位置付けられるのならば、政庁建替えの契機とされる天慶4（941）年の純友の乱頃に操業していたこととなり、政庁復興の瓦供給をおこなった一つの官窯といえる。また、この窯でこの時期としては復古調の大宰府式鬼瓦A類が焼かれていていることは、第III期大宰府政庁の復興の中心的な瓦窯の一つであったと位置づけることができるであろう。

瓦供給をおこなった歴代の主要な大宰府官窯群としては、8世紀前半から9世紀まで創業した国分瓦窯跡（国史跡）があり、次の段階として9世紀から10世紀初頭前後の剣塚瓦窯（消滅）、それに続いて10世紀の般若寺瓦窯（消滅）、来木北瓦窯（消滅）が位置づけられ、次の段階として松倉瓦窯（現存）、都府楼北瓦窯（特別史跡内）があり、その次に10世紀後半から11世紀の小正府遺跡（消滅）の坂本瓦窯（天延3（975）年七月七日銘瓦出土）、10世紀後半から12世紀の来木瓦窯＝蔵司瓦窯（一部現存）が位置づけられる（表1）。官窯としての大宰府の瓦窯は、10世紀頃までは官道やそこから派生する道路近くの条坊域外に占地するが、その後は条坊域に進出して最終的には条坊の北稜域に収斂していく（第1図）。

官窯としての松倉瓦窯は、文字瓦の出土状況から「佐」字を用いる佐伯氏の工人集団が主体者であったとみられるが、二重格子の叩き目が少数出土することから「賀茂」銘の瓦を生産した工人集団も関りがあった可能性がある。ほぼ同時期の般若寺瓦窯出土の文字瓦は「平井」銘が大半を占めることから（大宰府条坊跡第271次調査）、こちらは平井氏が主体となった工人集団であったことが察せられる（松倉瓦窯の前段階の剣塚瓦窯では「佐伯」と「平井」の双方の文字瓦が出土し、複数の工人集団が窯を共用していた）。

いずれも工人集団の差はあるが、窯の形態が地下式であり製品を置く焼成部が無階で、燃焼部と焼成部の境が有段の登窯（地下式無階有段登窯）であることが共通している。平安時代を通じて各地区の窯の基本的な形態が変化していないことは、官窯としてのバックボーンが同じであったことに起因しているのではないかと考えられる。

2024年12月27日脱稿

## 【註】

木村清・松田信氏記録

「昭和30（1955）年

4月22日宅地用に山林開墾に行く。石斧磨製2ヶ。

4月26日

4月29日開墾を始めてすぐ多量の瓦の堆積部につき当たる。

しばらくして丘陵部端を削り中、窯口の石組みを発見。

あとで瓦窯（1号窯）と分かり、残念ながら石組みを取り除く。

そばで唐模様のセイジ出土。

午後それより5m離れた柿の木の近くより鬼瓦出土。

瓦窯1基、佐字瓦多数、巴瓦多数、鬼瓦1、セイジ1個。

4月30日筑紫丘高校近藤（典二）先生外学生四名視察にみえる。

5月2日1号窯より2.5m離れた左手より2号窯口石組み及び窯を発見。

入口はふさがれていて焚口近くより鬼瓦1基、紋入巴先瓦2基、土器3ヶ発掘。

窯の大部分輪郭を出す。地より堆積瓦多数出土。

5月3日2号窯を一応堀崩し、奥行約3m、直径2.13mのマンドリン型で、

焚口より1.15mのところの一段の段を有し、多量の埋蔵瓦あり。

一応実地測量した。然し大部分は底部をそのまま残す。

又窯中より土器2ヶ出土（完全なもの）。

5月5日1号窯右手3.4mのところに第三号瓦窯を発見。

石組み取除いたまま未発掘である。

又第二号窯左手より出 瓦窯の可能性あり。

2号窯大部分取除き1号窯三分の2を残す。

これで一応整地作業完了。

3号窯より土器出土1ヶ。瓦堆積部分は第二号窯左手すぐである。

これは厚さ約70～80cmの層をなす。土器（完全）1ヶ。

5月6日土地入口より玄関口の整地作業中、入口近くより四角な石組み発見。

今のところ何であるか不明。

5月12日福岡高 森貞次郎、筑紫丘高 近藤典二両氏15時頃来訪され、

鬼瓦、紋入軒先瓦等の写しとらる。それから現場検証のため視察。

平安時代とのこと。遺跡発見届の規則書提出要領教わる。

5月13日あいにく朝から四六時中雨だったが、昼過ぎより現場の残瓦整理のため行き、持ち帰る。

5月14日発見届役場に提出。

5月16日11時頃、県教育庁社会教育課 麻生氏、朝日新聞社福岡総局より写真撮りに来訪

され、自宅で3枚、現場にハイヤーで行き3度写す。

いろいろ今後の事について達示あり。細目は兄に言付けらる。

夜、兄より書類その他の事項、連絡あり。

5月17日朝日新聞（地方版）に写真及び説明がのり、地方版としては大きい。

しかも写真二枚である。

8時頃、立入禁止の立札をたてに行き、多数の瓦を収集した。

中でも一枚貴重な文字瓦あり。

〔月、木の各二字〕

〔月、木〕文字瓦一枚（破片）

※資料のご提供とご教示を木村謙喜様にいただきました。記して感謝申し上げます。

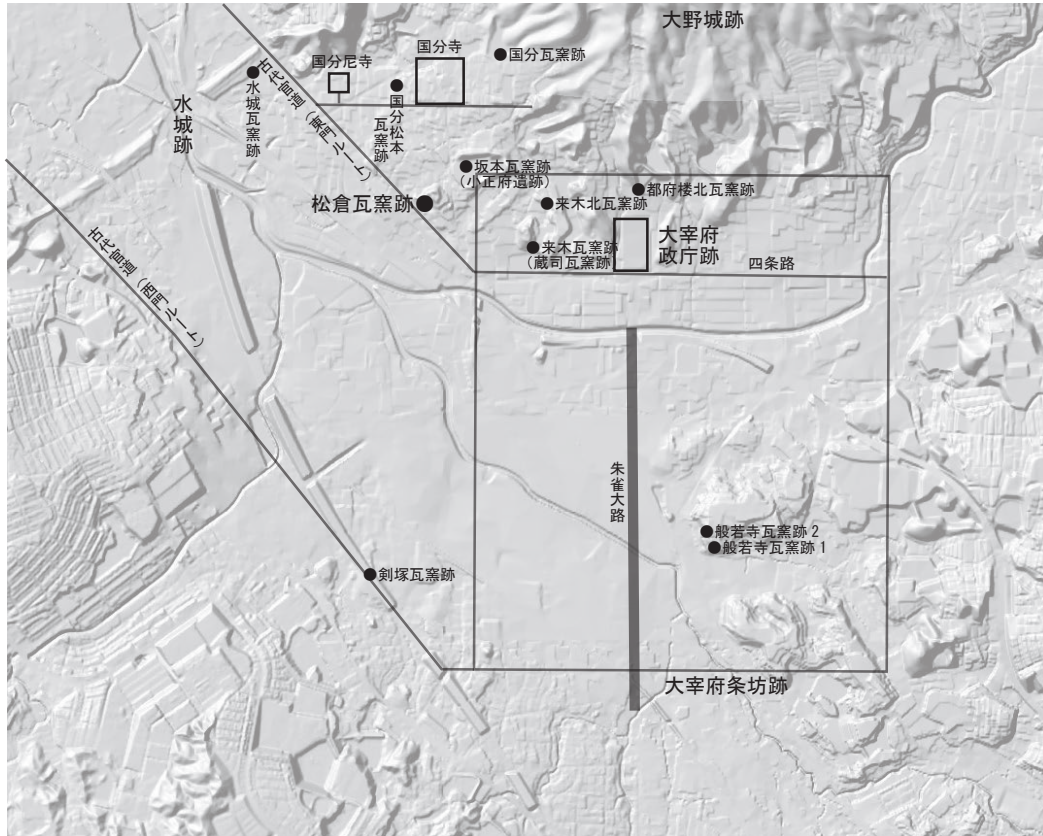
## 【文献】

本稿での瓦の分類と基礎資料は以下の文献に基づいている。

- 1 『大宰府政庁跡』2002年九州歴史資料館（瓦類の基本分類）
- 2 「宝満山出土の瓦分類について」「宝満山遺跡群4」2004年 太宰府市教育委員会
- 3 「都府楼の瓦を焼く」『太宰府市史考古資料編』1992年太宰府市（市内瓦窯調査の集成）
- 4 『九州縦貫自動車道路関係埋蔵文化財調査報告XXIV上巻』1979年福岡県教育委員会（剣塚瓦窯跡）
- 5 「大宰府の屋瓦 平井の文字がある瓦」『大宰府の文化財』300太宰府市広報2010年5月太宰府市（大宰府条坊跡第271次調査）
- 6 「文字が残る瓦 小正府遺跡で見つかった文字瓦」『大宰府の文化財』466太宰府市広報2024年3月太宰府市（小正府遺跡1～3号窯跡）
- 7 「国分瓦窯跡の調査」『筑前国分寺跡Ⅰ』1997年太宰府市教育委員会
- 8 「国分瓦窯跡」『都府楼』53号2021年山村信榮

（やまむら・のぶひで 太宰府市教育委員会文化財課参事補佐）





第1図 大宰府官窯としての瓦窯跡分布図（国土地理院 陰影起伏図を引用）

2号窯



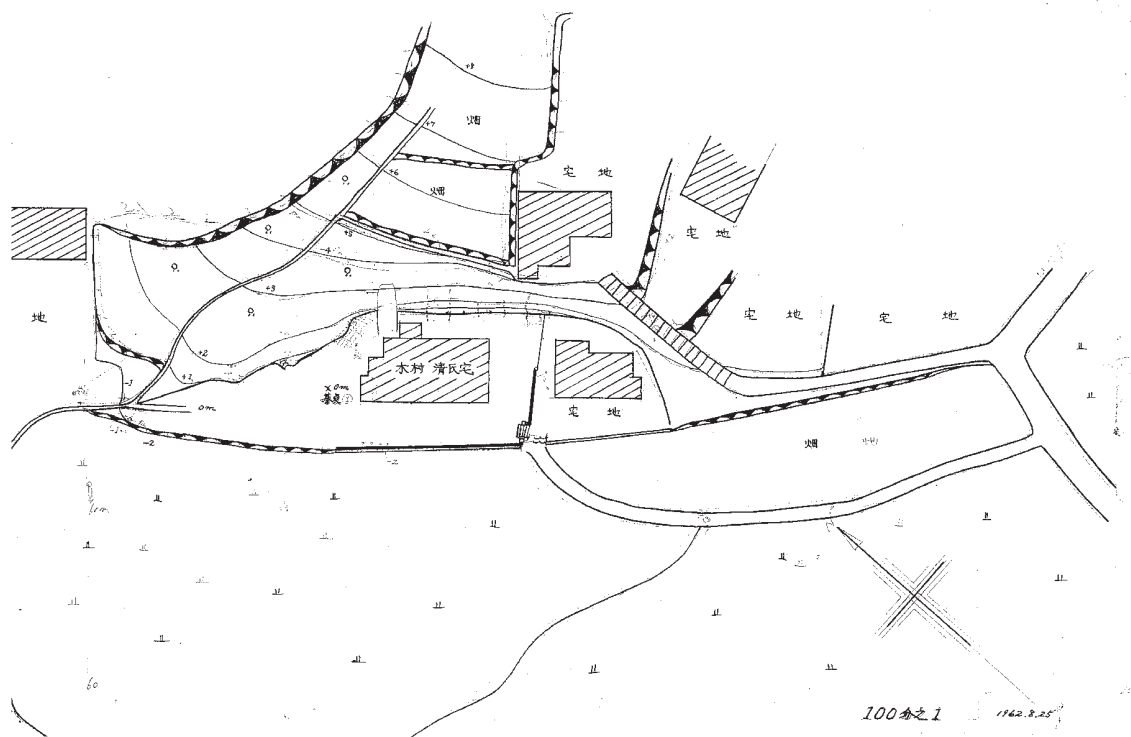
第2図 松倉瓦窯跡遠景（1962年大川調査）

第4図 松倉瓦窯跡（2022年市踏査）

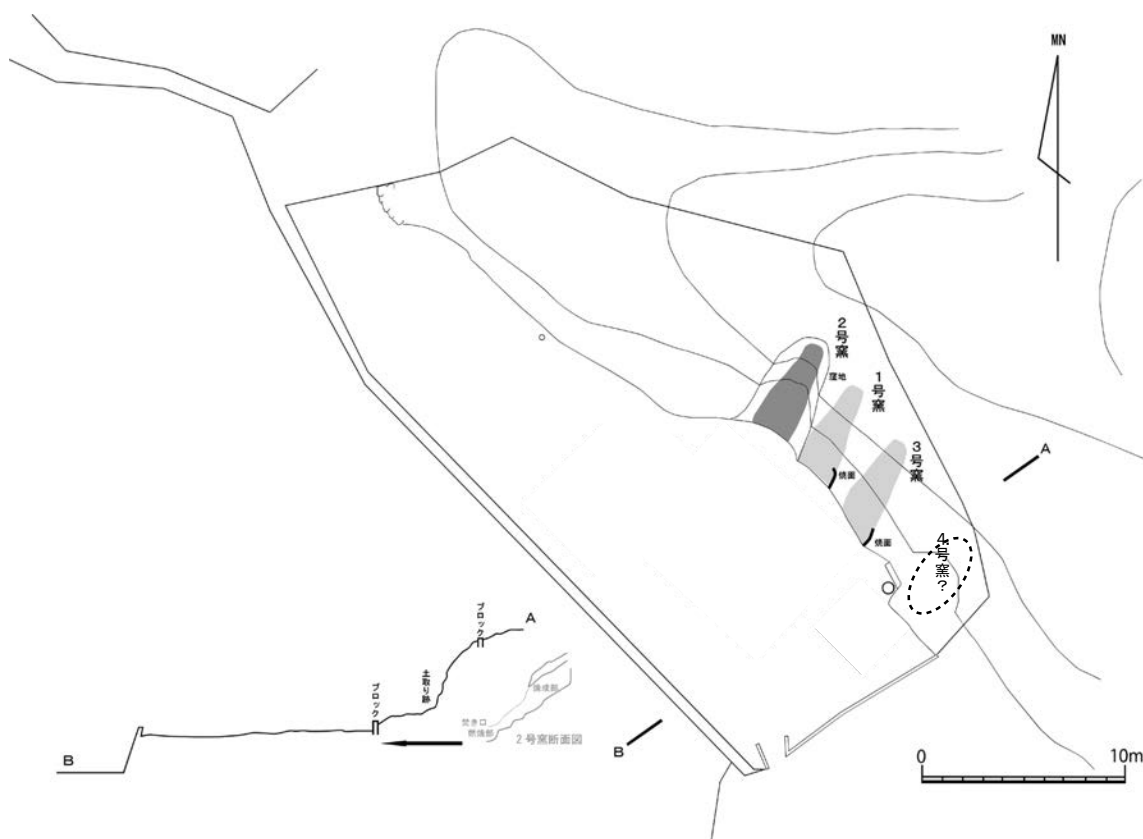


第3図 松倉2号窯跡  
（1962年大川調査）

第5図 松倉1号窯跡（2022年市踏査）

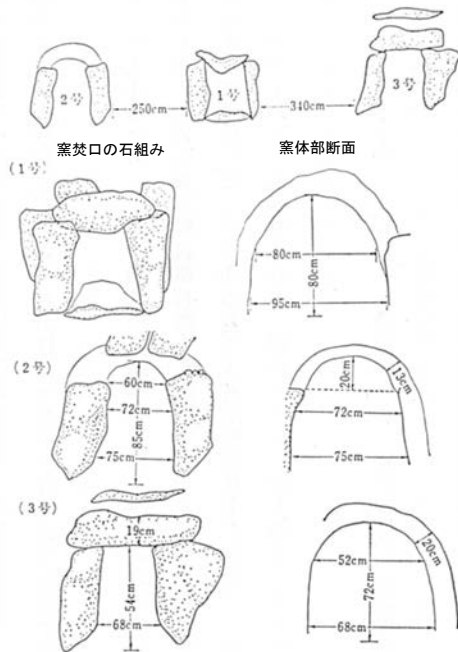
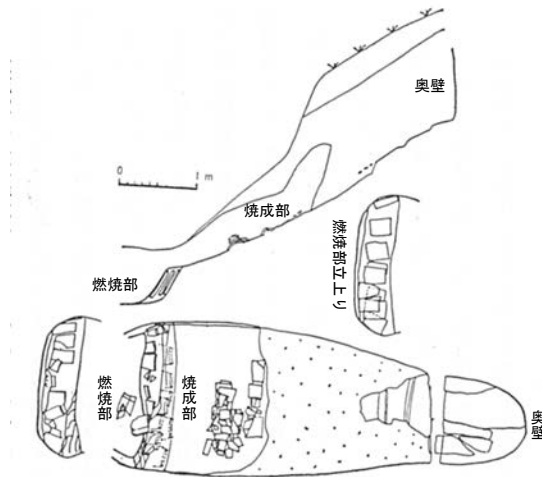


第6図 松倉瓦窯跡測量図（1962年大川調査）

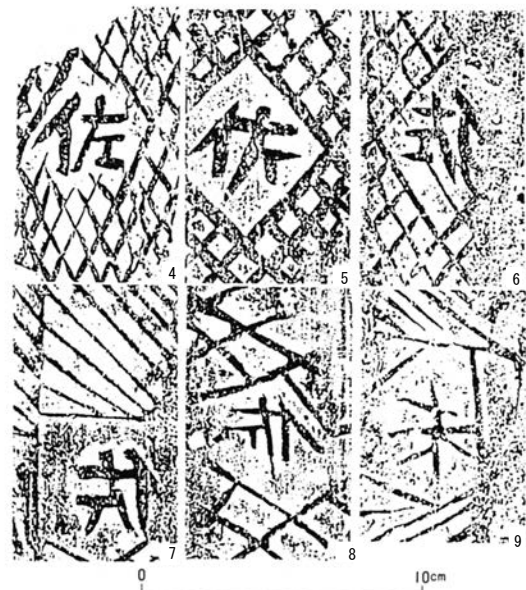
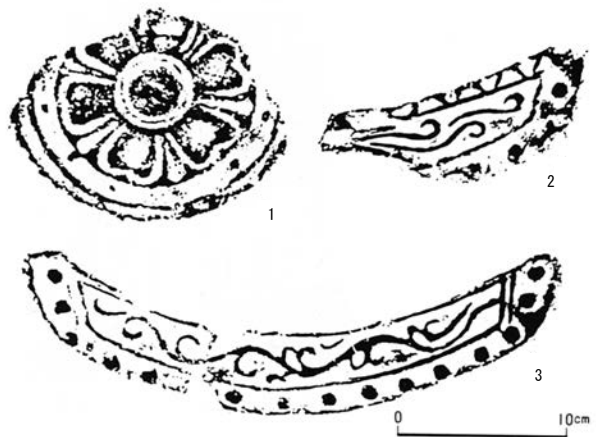


第7図 松倉瓦窯跡現況測量図（2022年市踏査時）

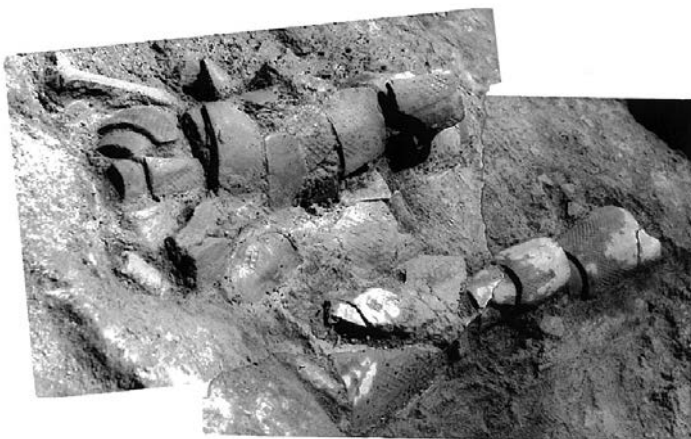




第8図 松倉2号窯跡 実測図 (1972年『日本の古代瓦窯』)



第11図 松倉瓦窯跡 出土遺物 (1992年太宰府市史)



第9図 松倉2号窯跡 焼成部床面 (1962年大川調査)

第10図 松倉2号窯跡 燃焼部立上り (1962年大川調査)



第 12 図 松倉瓦窯跡出土 大宰府式鬼瓦 A 類（地権者所有 宮崎亮一氏撮影）



第 13 図 松倉瓦窯跡出土 大宰府式鬼瓦 B 類（地権者所有 宮崎亮一氏撮影）

表 1 大宰府官瓦窯の変遷表

名称	種別	状況	基数	時期	文字瓦	格子目分類	構造	出典
老司瓦窯跡	史跡	現存	1	8 c		A	地下式無階有段登窯	福岡市1062集
水城瓦窯跡	特別史跡	現存	2	8 c		B	ロストル式平窯	市67集
国分瓦窯跡	史跡	現存	9	8～9 c		D	地下式無階有段登窯	文献7, 8
国分松本瓦窯跡	包蔵地	現存	2	8 c、9 c		D	構造不明	市94集
般若寺瓦窯跡1	包蔵地	消滅	1	9 c 前		B	構造不明	市92集
剣塚瓦窯跡	包蔵地	消滅	1	9 c	佐伯、平井、大	D	地下式無階有段登窯	文献4
般若寺瓦窯跡2	包蔵地	消滅	5	10 c	平井	D	地下式無階有段登窯	文献5
来木北瓦窯跡	包蔵地	消滅	2	10 c	佐	D/E	地下式無階有段登窯	文献3
松倉瓦窯跡	包蔵地	現存	3	10 c	佐、未	D/F	地下式無階有段登窯	本稿
都府楼北瓦窯跡	特別史跡	消滅	2	10 c	賀茂	D/F	構造不明	文献3
坂本（小正府）瓦窯跡	包蔵地	消滅	3	10～11 c	佐、筑、四王、天延三年	D/F	地下式無階有段登窯	文献6
来木（蔵司）瓦窯跡	包蔵地	一部現存	9	10～12 c	佐、平井、賀茂、安楽寺、介	E/F	地下式無階有段登窯	文献3